
AKUMA

天鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

AKUMA

【Nコード】

N7981D

【作者名】

天鈴

【あらすじ】

《ロア》と呼ばれる大きな土地には《人》と《アクマ》人を害する者《が共に存在していた。《アクマ》を恐れた《人》はいくつもの町を作り《アクマ》と戦うための武器、《聖武器》を使う《アクマ狩り》を雇って《アクマ》から身を守り暮らしている。そんな危険な土地で渡りの《アクマ狩り》として旅をしている青年と少女の物語。

「0」 プロローグ（前書き）

作者はBL書きですがこれはBLではありません。
残酷な描写が一部あるかもしれませんが、苦手な方は注意して下さい。

「0」 プロローグ

「アナタがアクマ？」

鬱蒼とした暗い森の奥、涼やかな少女の声が響く。
闇の中に溶け込んだ人影が獣じみた笑みを浮かべた。

「オレがアクマなら何だと言っただ？」

「アナタが本当にアクマなら私を殺せる？」

「容易い……」

幼い仕草で小首を傾げた少女に向かい人影から伸びた闇の剣が走る。

『ザシュ！』、と鈍く何かを貫く音と共に真っ赤な花が闇に散った。

「1」 黒と金

切り立った崖の中腹、地面さえも見えない高みに突き出した岩の先端に腰掛けたままディ・フェイダは丸い眼鏡の奥の瞳を手に持つ羊皮紙へと向ける。

「んーっ、前回はまいちだったよな。今度はレアだといいんだけど」

ぼりぼりと黒い髪を乱雑にかき回した後、ごろりと岩場へと倒れこんだ。

ふわりと岩に生えた草に身体を包まれる。

左右は空、背後は切り立った岩場。普通の人間がどう足掻いてもこられないほどの高みにある絶壁は人の手が入らないからか休憩場所にはなかなか快適だ。

先端からぶらりと突き出した足の下には、はるか何百メートルも
の空も広がっている。

仕事の相手が留守だと分かったときはどうしようかと思ったが、近くによさそうな岩場があつてよかったな。とぼんやりと思いがら、草の生えた岩へと髪を押し当てたままで頭上を眺める。

その視界に金の光が揺れた。

「ベル。あんまりあちこちに触ると危ないぞ」

ディの視界の先、岩の割れ目から生えた草を興味深そうに眺めていた小柄な影がふわりと振り返る。

「……んっ」

それに吊られて柔らかかに波打つ金色の髪が舞い、幾重にも細かいレースがあしらわれた袖のない白いドレスが花のように広がる。

シンプルながらも特殊な光る布でできた服は貴族でもなかなか手の出せない高価な物だ。けれど、そんなドレスも少女の姿を引き立たせる小物でしかない。

ふっくらとした薄桃色の唇と幾重にも睫に彩られた淡い碧の瞳。

薄桃色に染まる白い肌。小柄な身体付きと相まって人形めいて見える少女は、その容姿よりも輝く愛らしい笑顔を満面に浮かべ、ディへと駆け寄ってくる。

「はい……ディにも上げるよ」

寝そべるディの頭の横に服が汚れることさえ気にせずにくたたりと座り、小さな手が赤い実を差し出した。

赤い実は野生の果物の一種で毒もないものだ。

差し出されることに否はない。

だが……

「ベル。もしかして先に食べた？」

がばりと重さを感じさせない動きで腕だけで跳ね起きたディは少女の前に正座して、座っても頭二つ分ほど小さな少女を見つめる。

黒と碧の瞳が一瞬だけ重なり、先に碧の瞳がそらされる。

「食べてない……よ」

などと言いながらもベル・フェティダは実を差し出してない方の手で口許を隠した。

その仕草で食べたことはバレバレだ。

「あれほど俺が毒見するまで食べちゃダメだって教えただろ？」

がしつとベルの頭を両手で掴んで、しっかりと目を合わせてからディはじつと碧の瞳を見つめる。すると碧の瞳がうるつと揺れ始めた。

「言われたけど……ディにおいしい方をあげたかったんだよ」

うるうるつと揺れる大きな瞳は保護欲をそそるには十分だが、慣れているのかディに動揺の様子はない。

「うん。気持ちは嬉しい。ものすごく嬉しいけど、お兄ちゃんはおいしい実を食べるより、ベルのおなかが痛くなったり苦しくなったりする方がいやだな」

声を荒げることなく瞳を見つめたまま淡々と語られる言葉にベルはしぶしぶと頷く。

それを確認したディの顔ににっこりと満面の笑みが浮かんだ。

「いい子だね。じゃお説教はここまで、はい、あーん」

ぱかっと思抜けに口を開くディに一瞬目を瞬いた後、すぐに甘い笑みを浮かべてベルは手に持ったままの赤い実をディの口へと入れる。

「ん、おいしい。ベルはおいしい実を見つけるのが上手だね」

すっかりと味わった後、ぐりぐりと頭を撫でるディはその言葉がまた同じことを繰り返させているということにまったく気づいていない。

「じゃ、そろそろ行こうか。時間もちょうどいいし」

「うん……」

ゆっくりと立ち上がり外しておいた黒い細身の鞆をマントの下に戻し、ベルの身長と変わらないほどの大きなリュックをマントの上から軽く背負う。

その間にベルは地面に放り出していたドレスとおそろいのレースでできた大輪の花のあしらわれたシヨールを不器用そうに身体へとまとった。

「ベル」

ベルが服を調えるのを待つて片手を伸ばすディへと白いドレスと金の髪をひらひらと揺らめかせてベルが飛びこむ。

「ちゃんとつかまっているんだよ」

片腕でベルを抱き上げた格好でディは崖を見上げる。ほぼ垂直の壁は登山具があっても登れるようなものではない。

それでも、ディはまったくの気負いもあせりもないのんびりとした顔を壁へと向ける。

「じゃ、行きますか」

にやりと口元を綻ばすと、肩にかかる黒い髪がふわりと風に舞った。

「 2 」 《アクマ》

その土地には大勢の人間が暮らしていた。

豊穡な土地、温暖な気候、切りがなく増え続けていくだろう人には敵はなかった。

《アクマ》と呼ばれる生き物が存在することに気づくまでは。

《アクマ》には形はなく、その種類も定められてはいない。恐ろしい力を持つ化け物だったり、人の群れに馴染めず逸れた人の集まりだったり、人を害する物の総称として《アクマ》という呼び名があるだけ。

力のない人々は身を守るために大勢で集まり町を作った。それらの町をまとめる為に国がいき、王族という一部の特権階級も生まれた。

そうなると今度は特権階級を守るために《アクマ》と戦う者が生まれ、《アクマ》と戦うための武器が生まれる。

《聖武具》と呼ばれる特殊な武器はそれぞれに特徴があり、生活に混じるものから《アクマ》を狩ることしかできない武器まで多数の物が作られ、今も続けられている。

《アクマ》の血や皮や骨を材料として。

* * *

「んーっ、ハズレかなあ」

崖の先端に這うようにして下を見下ろしたディは溜息交じりにその口に出していた。

《アクマ》の鱗で作られた丸眼鏡の中でも特殊な遠見機能を駆使しても崖の下にいる一段の中に《ホンモノのアクマ》らしき姿はどこにもない。

見えるのは、どこかを襲った後か、様子を見に行った帰りか、次

から次へと崖の向こうから橋を渡って戻ってくる薄汚れたおじさんたちと馬ほどの大きさのトカゲ型の《アクマ》くらいだ。

「まあ、食べるでもなくさらうっていう時点ではよばい《アクマ》だとは思ってたからまあいいんだけどさあ……レアの《ホンモノのアクマ》だったらバラして売れるのに使えねえ」

これでは面白くもない。

「いっぱいだよ」

低く吐き捨てるデイの横、同じ格好で下を覗きこんでいたベルが嬉しそうに言う。

眼鏡のないベルには小さな人やトカゲが玩具のように動く姿が面白いらしい。

「そうだね。あれだけいるんだから、はした金くらいにはなればいいなあ」

数十人の《アクマ》にも怯むようすもなくデイは胸元から羊皮紙を取り出した。

中央に書かれているのは鎖に絡まれた十字架。

《アクマ》を狩るのを生業にしている《アクマ狩り》に仕事を斡旋するギルドのマークだ。《アクマ》相手だから、十字架というのも短絡的な気もするのだが、デイには関係ないことなのでどうでもいい。

「えっと……生死は不問。換金アイテムはボスの首。とりあえず町にこなくなれば好きにしてい。か。んーっ、女の子でもいれば売れるんだけどなあ。おじさんじゃないからさくつといくか」

どちらが盗賊か分からないようなことを口にしてデイはにやりと笑みを浮かべる。

「ベルはどうする？」

「私も行くよ」

んーっとながかり落ちそうに覗き込んだままの格好のベルへとのかげりと訊ねれば、怯える風もない声が返される。

「汚れるぞ」

「一人でいてもつまらないよ」

「それもそうだな」

崖の下には武器を持つだろう盗賊の群れ。

対してディはたった一人だ。

足手まといになりそうなベルの言葉を気にするでもなくあつさり
と同意してまだ覗き込んだままのベルの身体を片手で抱き上げる。

そして、そのまま足元に広がる玩具の王国へと躊躇もなく飛び降
りた。

* * *

盗賊たちは《アクマ》と呼ばれることを誇っていた。

《アクマ》とは強いものへの総評に近い。

けれど、それと同じだけ危険だとも知っていた。

深い崖を挟んだ向こうにある人目につかない広場を見つけたのは
偶然。

背後には人が登ることなど不可能な切り立った岩壁。周囲は底が
見えないほどの崖。崖と崖を繋ぐのはたった一本の橋。

《アクマ狩り》でも容易に近づけない天然の要塞を手に入れ、こ
れからさらに力を付けていく。はずだった。

見上げれば首が痛くなるほどに高い崖の上から《何》かが落ちて
くる。

それに気づくことができたのは数人。

文字通り舞い降りた《何》かは、衝撃すらないのか、小さな少女
の人形を腕に抱いたまま音もなく地面に降り立つ。

「誰だっ」

それに気づいた数人が反射的に怒鳴るのにつられて振り返った残
りのすべての盗賊たちは岩壁を背に立つ突然現れた人間の存在に目
を疑う。

少年と青年の合間ほどのまだ年若く見える男が当たり前のように

金の髪の少女を片腕に抱えてその場に立っていた。

上から下まで真っ黒な服の上に地味なマントを羽織り、丸い眼鏡を掛けた姿はこの町でも見られる凡庸なもの。《アクマ》の陣地に取り込むにはあまりに普通すぎた。

動揺に攻撃に出ることもできず騒ぐ盗賊たちを尻目に男は腕に抱えた少女を岩陰へと降ろし、腕に背に背負ったカバンを持たせる。

「すぐに済ませるからここで待っているんだよ」

「……ん」

少女が頷けば金の髪がひらりと揺れた。

「さつてと、待たせたな」

少女を岩陰に座らせたまま、謎の男、ディ・フェティダはゆつくりと盗賊たちへと視線を向ける。

呆然としながらも盗賊たちはすでにその手に武器を持っている。

銃に似ていながらも、丸い石や棘を生やすさまざまな形をした武器は《アクマ》を使って作られた《聖武具》。たとえ名前に聖と銘打とうとも、武器は《アクマ》も《人》も区別しない。

「武器はまあまあ……かな」

ぼつりと独り言を口にして、自分は武器を持たずに何十人もの《アクマ》へと対峙する。

「何だ。お前は……」

緊張感のないディに武器を向けたまま盗賊たちは意味のない質問を口にする。

「自己紹介するのも面倒だし、手っ取り早く……」

それをのんびりと聞き流し、ディは薄っすらと楽しげにさえ見える笑みを口元へと浮かべた。

「一人残らず死んでもらうよ」

「てめっ……」

言葉が終わるのも待たず、盗賊の手に持つ武器から鈍い色の棘や礫が風を切り弾き出される。

さまざまな起動の飛来物に目を細め、ディは剣を吊るために斜め

に肩にかけたベルトの前側に吊られた小さな飾りナイフを鞘から抜いた。

ひらりと音もなく飛来物へと自分から向かっていく。

鋭い音を立てて棘がマントを貫き岩壁に刺さり、方向をそらした礫は地面に当たると同時に爆裂し大きな穴を開ける。

《アクマ》力の源を銃身に埋め込み。さらに精度を増した《聖武具》から打ち出されるそれらは《アクマ》の鱗さえも破壊する力を持っている。

だと、いうのに、デイの身体に当たる部分の棘は逆手に持った赤い刀身のナイフに落され、爆発するはずの礫さえただの石のように別の方向へと弾かれる。

鈍く輝く赤いナイフが舞う蝶のように銃撃の中を踊り、徐々に盗賊たちの中心へと近づいてくる。

「くるなっ！」

高く上がる声には異質なものの怯えが混じる。

それに答えないデイの顔に浮かぶのはやはり緊張感のない笑み。

町へでも買い物に行くという風情のまま、デイは《本物のアクマ》にさえ傷を付けるだろう銃撃の中を赤い刀身のナイフ一本で傷ひとつなく踊り続ける。

ひらりと、舞ったデイの身体が盗賊たちの中心へと降りたつた。

同士打ちを避けるためか銃が地面へと捨てられ、盗賊たちの手に大降りの剣が握られる。

「その剣は……《聖武具》じゃないね」

ちらりと視線を周囲に飛ばし、武器を確認してからデイは赤いナイフを鞘へと戻し、もう一方の手でマントの下の黒い鞘から黒い刀身の細長い剣を抜き放つ。

「《聖武具》には傷を付けたくなかったから助かるよ」

相変わらずわけの分からないことを口にし、殺意に溢れるすさんだ男たちを睥睨した。

順番に盗賊の顔を確認していく。顔を見たからと言って誰がボス

かはわからないのだが、ディを囲む男たちから一步後ろに引いた位置に立つ大柄な男がディと目が合うと同時に残忍な笑みを浮かべた。
「殺せ。相手は一人だ」

命令の声を合図に鈍く汚れた剣を手にした男たちがディへと殺到する。

「……見つけた」

その場から動こうともせず、すうっと黒い刀身の細身の剣が駆け寄る男たちへと舞う。

大勢の男たち、鈍く光る凶器。

それらすらないもののように黒い剣は彼らの中を何の抵抗もなく通り過ぎた。

最初に聞こえるのはボトリと何かが落ちる音。

殺到していた男たちは痛みすらなく自分が地面へと落ちたことに気づく。

呆然とした視界に映るのは自分の物だったはずの下半分が彫刻のように立ち尽くしている姿。

「あああああっ」

高く上がる悲鳴。

それに呼応するようにいくつも立つ彫刻から赤い花が空へと散った。

「……何だ。お前……は」

殺せと叫んだ男の口から掠れた声が漏れる。

その男へと赤い花に全身を濡らしながら黒い刀身を揺らめせた格好のディが視線を向ける。

「……何って……《アクマ狩り》」

動けない盗賊たちの真ん中で、すべてのものを切り裂く黒い剣を手にしたまま赤く染まった《アクマ狩り》はにいつと妖しい笑みを浮かべた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7981d/>

AKUMA

2010年10月31日04時06分発行